

作品解説

1 側役御用留 (宝暦7年[1757]正月16日条) 1冊 (作品リストNO. 7)

重要文化財

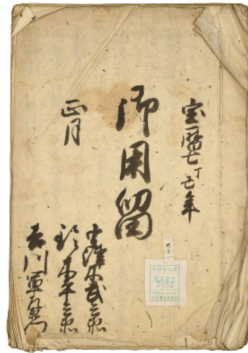
縦 29.6cm 横 20.8cm

江戸時代 宝暦7年 (1757)

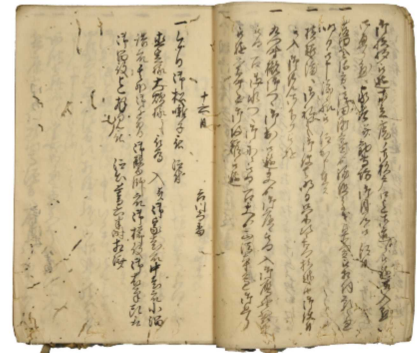
当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

井伊家10代直幸 (1731~1789) は、藩主となる以前に喜多流宗家に弟子入りするなど、早くから能に強い関心を寄せていました。直幸が藩主になると、井伊家の演能記録は急激に増加します。直幸は、面・装束を身に着けずに曲の後半を演じる囃子を度々催し、自らも舞を舞い、鼓を打ちました。

直幸はまた、御殿での正月の行事である松囃子を定例化しています。現在確認される最も早い松囃子の記録は、「側役御用留」に記された宝暦7年 (1757) 正月16日で、表御殿御座之間に仮設の舞台である敷舞台を設けて実施されました。これ以降も、直幸は正月15日前後に松囃子をおこなっており、直幸以降の演能記録からも、井伊家における松囃子の定着が確認できます。



(表紙)



(展示箇所)

2 黒御門前御屋敷日記 (寛政12年[1800]12月18日条) 1冊 (作品リストNO. 16)

重要文化財

縦 14.5cm 横 41.0cm

江戸時代 寛政12年 (1800)

当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

彦根城博物館の中央に位置する能舞台は、明治時代初期以降、市内の神社などに移築されていた彦根城表御殿の能舞台を、元の場所に移築復元したものです。この表御殿の能舞台は、寛政12年 (1800) 12月18日に舞台開きが行われました。この時の藩主は、井伊家歴代の中でも特に能を愛好した11代直中 (1766~1831) で、幼少から謡や鼓の修養を重ね、父である10代直幸と同じく喜多流宗家の弟子となりました。

直中の弟の勇吉などが暮らす、黒御門前屋敷付きの藩士が記した日記には、この舞台開きの様子が記されています。勇吉たちは、明け六つ時 (午前7時) 過ぎに表御殿に上がり、藩主である直中に対面した後、現在の博物館の正面見所にあたる場所にて能を拝見し、能が終わった後、直中に御礼を述べ、暮六つ半時 (午後6時) に屋敷に帰りました。舞台開きの能は、一日かけて行われたこと



が分かります。当日の演目や役者については触れられていませんが、この前年、寛政11年（1799）に、直中は、喜多流宗家の甥をはじめとする7人の役者を召し抱えていることから、おそらくこの役者が動員されたものと考えられます。

これ以後、初代直政や2代直孝の250回忌といった先祖の遠忌、藩主の家督相続、藩主就任後に初めて彦根へ入る入部、還暦の年賀など、様々な行事に伴う能が、表御殿の舞台で行われました。

3 表御殿御能拝見席図 1枚（作品リストNO.18）

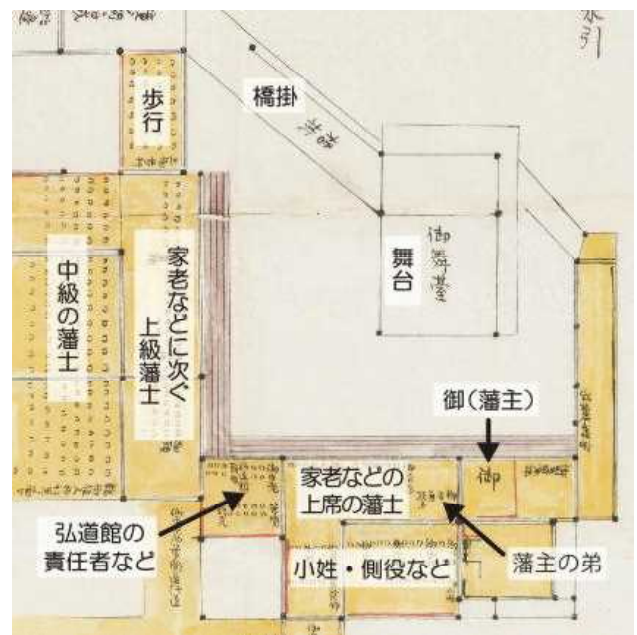
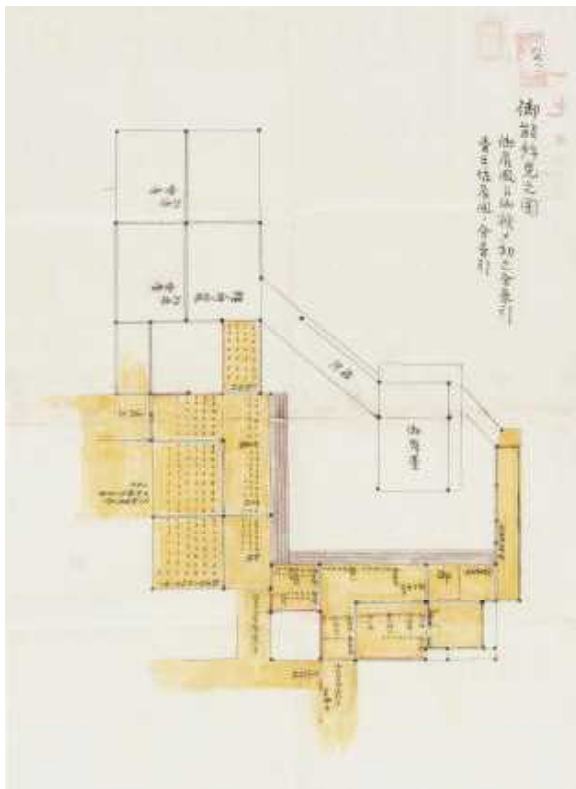
重要文化財

縦 39.8cm 横 55.9cm

明治20年（1887）

当館蔵（彦根藩井伊家文書）

表御殿の能舞台で、能を拝見する際の席順を表した絵図。江戸時代の記録を元に、明治時代に作成されました。藩主の席は、能舞台に向かって右前方の「御」と記された場所です。藩主の右手側と背後には、屏風あるいは襖が立てられました。この位置からは、舞台上だけでなく、舞台左奥の橋掛もくまなく見渡すことができます。藩主の左側にはその弟たちが坐り、これに続いて家老や中老などの上席の藩士が並びます。その後ろには、小姓や側役といった藩主の側近くに仕えた藩士が坐りました。上席の藩士の席に続く、能舞台を左斜めから見る場所は、藩校弘道館の責任者である頭取などの席。舞台左側面の脇見所にあたる場所の前列には、物頭や番頭といった、家老などに次ぐ上席の藩士、その後ろには中級の藩士である諸役人が並びます。橋掛と接する、舞台を後方から見る場所は、戦闘の際に馬に乗らず徒歩で参加する歩行の席となっています。このように、藩主の左から順に、家格や身分によって席順が細かく決まっていたことが分かります。規模の大きな演能の際には、このように大勢の藩士が居並んで能を拝見したのでしょうか。



【参考】能を拝見する際の席順

7 ^{のうやくしやゆいしよらう}能役者由緒帳 1冊 (作品リストNO. 38)

重要文化財

縦 29.6cm 横 22.3cm

江戸時代後期

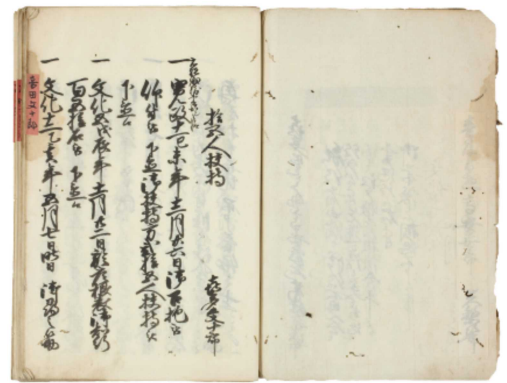
当館蔵 (彦根藩井伊家文書)

寛政11年(1799)12月26日、11代直中^{なおなか}は、喜多流宗家の甥である織衛^{おりゑ}をはじめ、7名の役者を召し抱えました。本史料は、これ以降に井伊家のお抱えとなった役者の由緒や経歴を、家ごとに記したものです。織衛にはじまる喜多家を筆頭に、断絶、御暇となった家も含めて28家が記されており、最も多い嘉永年間(1848~1854)には21家が雇用されていたことが分かります。本書のなかには、大蔵流の狂言役者、茂山千五郎^{しげやません ころう}が、12代直亮^{なおあき}(1794~1850)の代である天保13年(1842)10月18日に召し抱えとなったことも記されています。

これらお抱えの能役者は、井伊家が行う能に出演するのは勿論、藩主やその子弟への能の教授に加え、町役者への指導、あるいは能道具の鑑定なども行いました。



(表紙)



(展示箇所)